柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話:070-1503-6401/044-988-0004
http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo
第 156 号

多摩丘陵に残る
義経の面影 - 最終回

稲毛三郎重成と源義経（その２）

麻生歴史観光ガイドの会名誉会長　松本良樹

5.　建久 9 年(1198)重成は亡き妻の為に相模川に橋を架けます。この橋の落慶供養に出席した頼朝は、帰りの道中で落馬し、それがもとで逝去されたと言われています。この橋がどこに架けられたのか不明でしたが、大正 12 年(1923))の関東大震災の液状化現象によって茅ヶ崎市下町屋１丁目の地中から出現したのです。この『旧相模川橋脚』は、重成が架けた橋だと鑑定され、平成 25 年 3 月に国の史跡および天然記念物に指定されました。

この橋脚の素材は 1126 年～1260 年の一時点に伐採されたヒノキ材だったそうで、現在では、この写真のように整備され奇麗になっていますが、この杭は合成樹脂で作られております。

稲毛重成が妻の供養に建てた相模川の橋脚跡

6.　元久 2 年(1205)6 月に武蔵国二俣川(現横浜市旭区保土ヶ谷区)において、武蔵国の有力後家人　畠山重忠が武蔵国の掌握を図る北条時政の策謀により、北条義時率いる大軍に攻められ滅ぼされました。畠山重忠は愛甲三郎季隆の放った矢によって落命したと言われています。その原因は稲毛三郎重成の裏切によるもので、重成が時政の意を受けて無実の重忠を讒言したとされ、重成は大河戸行元によって殺害され、弟の榛谷重朝、その子太郎重季、次郎秀重は三浦義村によって謀殺されました。この事件は北条氏による鎌倉幕府を私物化しようと図った北条時政の陰謀です。時政は同じ御家人であった梶原景時、比企能員、畠山重忠などの有力御家人を次々に粛清し執権としての地位を確立したい願望によるもので、政子・義時の姉弟により父時政を失脚に追い込んだもので、稲毛三郎重成の裏切りではありませんでした。

7.　元久 2 年(1205)11 月、一族の小沢重信が乳母夫を務める 2 歳の姫を伴って京から鎌倉を訪れます。姫は綾小路師季と重成の娘の間の子で、北条時政の外曾孫であった。哀れんだ政子が綾小路の姫を自分の猶子として、重成の遺領　武蔵国小沢郷を与えます。また一族の大半が讃岐に落ち、現在の香川県満濃町には稲毛姓が残っています。

8.　稲毛三郎重成のお墓は多摩区の枡形城址の北側のふもとにある、広福寺にあります。この広福寺は承和年間(834～848)に慈覚大師によって開かれた後、鎌倉時代に長弁阿闍梨によって中興されたと言われています。現在は真言宗豊山派に属し準西国稲毛 33 ヶ所観音札所第 1 番となっています。

また、本堂には本尊の木造五智如来坐像が安置されています。広福寺の社寺は、源頼朝の有力御家人の一人であった稲毛三郎重成の館跡ともいわれており、本堂内には木造の稲毛重成座像(桃山時代)が祀られています。　（完）

広福寺にある稲毛三郎重成のお墓

多摩区広福寺に残る三郎重成の仏像

鶴見川流域の中世
その 16

中世史料・資料の隠れた宝庫　恩田郷（その１）

中西望介（戦国史研究会会員・都筑橘樹研究会会員）

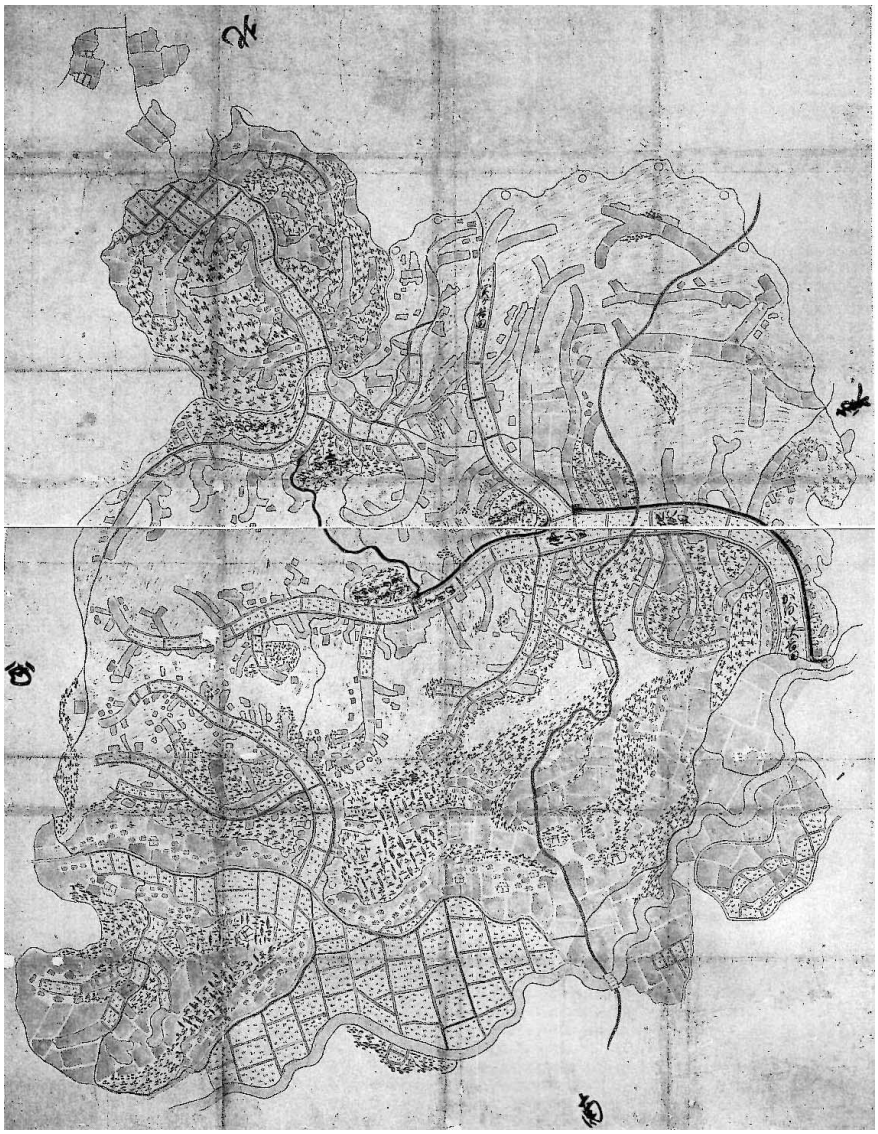
中世に生きた人々の生活の基盤となった郷村とはどの様な景観だったのだろうか。鶴見川流域を歩き集落・城館址・社寺や小祠・古墳や塚・石造物や墓地・古道・田畠や用水路等を観察しながら想いを巡らしてきた。地域史に取り組む者にとって郷村の景観を読み解く事は、史料や金石文に記された人物や事柄に具体的な姿や形を与える重要な仕事である。今回取り上げる横浜市青葉区恩田町は宅地化が進んでいるが、谷戸の景観が残り中世的な雰囲気を感じさせてくれる貴重なフィールドである。恩田は鎌倉時代から戦国時代は恩田郷、江戸時代から明治前期には恩田村とよばれていた。その場所は「こどもの国」の南側にあり、南は恩田川、西は東京都町田市成瀬境の丘陵尾根、東は田園都市線青葉台駅前を通る環状 4 号線の東側にある旧谷本村境の頼朝道と伝えられる尾根道を境とする広い地域である。

恩田郷を選んだ理由は2つある。1つは恩田郷が鎌倉時代から戦国時代までの文献史料が断片的ではあるが残り、さらに真言宗の古刹徳恩寺が所在し、鎌倉末期の万年廃寺梵鐘（他所に移動）や板碑・五輪塔・宝篋印塔などの石塔類、発掘によって得られた資料など中世を考える上での素材が豊かな土地である。

2つ目は元禄二年（1689）成合村・恩田村裁許絵図（以下元禄絵図と略）と享保五年（1720）恩田村裁許絵図（以下享保絵図と略）の 2 点の村絵図が残っている事である。この絵図を研究した久世辰男氏は「古地図から読む江戸時代の土地利用とその変化」において、近世以前に谷戸田の開発は限界に達し、近世前期には恩田川左岸の沖積地においても井堰灌漑による水田地帯が形成された。畑については、自然堤防・丘陵の緩斜面・谷戸奥などには中世（あるいはそれ以前）まで遡りうる伝統的な畠地が広がり、台地上部は雑木林や藪地であったと述べている。合田晶子氏は「享保 5 年の恩田村絵図と平成の地図を比較する」において、享保絵図と現行地図との比較研究を行って、絵図の縮尺はおよそ 1500 分の1で、デフォルメされておらず形が正確に描かれており、他の村々の絵図と違い現行地図にほとんどそのまま重ねることができる事を証明している。伊能地図よりも約 100 年前に正確な地図が作られた事は驚きである。それを証明してくれたことに感謝したい。

そこで、二人の研究に導かれて絵図から中世に遡れる情報を探り出すことにしよう。中世の景観を復元するには村絵図から近世的な要素を取り除き、中世の情報を加える必要がある事はいうまでもない。

ここで元禄絵図と享保絵図の違いについて触れておく、元禄絵図は恩田村全体が描かれているがデフォルメされて正確さを欠いている。田・畑・山林・秣場などの区別が明瞭に描かれ、当時の景観復元には有用である。享保絵図はデフォルメされておらず形が正確に描かれているが、訴訟に直接関係のない村の西側にあたる堀ノ内・井戸久保地区などが描かれていない。このため必要に応じて適宜 2 つの地図を使う事になる。今回は景観復元の必要性と恩田郷を選んだ理由の説明で紙面を使い果たした。次回は耕地と人家を取り上げる。（つづく）



地図1　元禄二年（1689）成合村・恩田村裁許絵図「青葉の村々と矢倉沢往還」より転載。南端に南西から東に向かって恩田川が流れる。やや東側に南北に延びる線は矢倉沢往還。細長く入り込む谷戸に水田が描かれている。

シリーズ
教育の歩み 第３部

日本の学校と教育（12）

小林 基男（柿生郷土史料館専門委員）

◆全国の状況◆

柿生地域の状況を綴ってきましたが、この地域は首都近郊の商品作物の生産地域でしたから、自営農民の間でも、さらには一部小作農たちでも、子ども達に読み書きや簡単な計算力を身に着けさせようとする意欲は強かったのです。だからこそ、第９回に記したように、極貧家庭をも含めた全村一丸となっての財力に応じた負担を受け入れ、自力で学び舎を建て、学校の経常 費まで村で負担することにしたのです。

しかし、目を日本全国に広げるとこうはいきません。明治国家の指導層は、先行する欧米諸国の近代文明を追いかけながら、国家の将来計画を練る上では、教育事業を率先して強化することが必要であることを、理解していました。だからこそ、資金的裏付けを欠くにも関わらず、全国民に対する初等教育の義務付けと、そこで発掘した優秀な子ども達を選抜して、中等教育から高等教育へのルートに乗せることに、心血を注いだのです。

都市部並びに都市近郊の商品経済の浸透した一部農村を除けば、就学率の向上はほとんど見られず、全国的には就学率はそれほど高くならなかったのです。日本における初等教育段階の就学率の向上は、工業化の進展が見られ始めた明治 20 年代後半から始まり、とりわけ日清戦争（1894～95 年、明治 27～28 年）の勝利後に鋭角的に上昇し、明治末には 90％の大台に乗ることになるのです。

学制公布直後の日本に戻れば、欧米諸国に比べると、教育需要の未成熟という大きな障害があったのです。農村から都市へという人の移動はまだ少なく、人々が村落共同体という伝統的集団の枠内で生活している状況にあっては、義務教育制度の導入は、既存の秩序の中に強引に異質の秩序を持ち込もうとする許しがたい行為であると受け止められたのです。

村の共同体秩序に順応して子どもたちを育てていた農民層や、仲間内の掟を金科玉条とする職人たちの間では、学校は無縁な存在でした。とりわけ明治政府が導入を決断した太陽暦（明治 5 年 12 月 3 日を明治 6 年 1 月 1 日と読み替えて、太陰暦から切り替えました。そのため明治 5 年は 12 月 2 日で途切れてしまい、大晦日を経ずにいきなり新年だと言われ、いずこも大混乱に陥ったことが知られています）は農業のリズムにあわないため、農村では使い勝手が悪いと大変不評だったのです。そのため大半の農村では、旧暦がそのまま使われましたから、太陽暦を使用する学校は、大変迷惑な存在だったのです。

ここに明治 30（1897）年に、明治政府が徴兵検査の場を利用して、20 歳の成年男子を対象者として実施した読み書き能力の調査結果があります（実施は全 19 府県でした）。当時の尋常小学校は 4 年間ですから、4 年制の尋常小学校を順調に卒業したとすると 10 歳ですから、明治 20 年に小学校を卒業した子どもたちの、卒業 10 年後の調査になります。結果は別表の通りです。4 年以上就学し、中には 7 年を超えて就学する者もいますから、尋常小学校を卒業して、4 年制の高等小学校に進んだ若者、何年も原級に留め置かれた若者などが混在していたことが読みとれます。調査結果で一番驚かされるのは、明治 30 年時点で 20 歳の成年男子の 24％もが自分の名前すら書くことが出来ず、識字能力を持たなかった事実と、自らの氏名しか書けない若者、氏名と住所などなら何とか書けるが、文章は書けない若者が全体の半分を占めている事実です。一応文章の読み書きが出来、手紙などを書くことが出来る若者は、26％に留まっているのです。これが明治 20 年前後の初等教育の実態でした。男性でこうだったのですから、当時男性より就学率の低かった女性を加えると、識字能力はさらに低かったことになります。初等教育を中心に、就学率と識字能力の飛躍的に高まりを見るには、明治 30 年代の到来を待たねばならなかったのです。（続く）

20歳男性の就学歴と学力（単位：％）

	全体	不就学者	二年就学	三年就学	四年就学	五年就学	六年就学	七年就学
姓名が書けない	24	75	20	6	3	3	1	0
氏名は書ける	17	16	36	17	7	6	3	1
氏名・住所は書ける	18	6	25	31	21	14	13	2
職業も書ける	15	2	12	24	27	24	25	7
手紙や文章も書ける	26	1	7	22	41	53	58	90
縦の計	100	100	100	100	100	100	100	100
構成比	100	23	26	16	12	6	8	9

最後の構成比を除き、全て縦の百分比で表されています。構成比は横の百分比
『教育持論』明治 31 年 11 月 5 日号より

第19回 特別企画展「写真で見るふるさとの原風景」ご紹介

1960（昭和 35）年 3 月に百合丘駅が開業するまで、現在の麻生区域には、小田急線の駅舎は柿生駅しかありませんでした。それだけこの地域は民家の少ない鄙びた農村地帯だったのです。そんな柿生地域に、都市化と開発の波が押し寄せてきたのは、東京オリンピックも大流行の余韻が冷めやらない 1960 年代半ばの事でした。そして 1974（昭和 49）年 6 月には小田急多摩線が開通し、新百合ヶ丘駅（当初は世田谷通りからはどこに駅があるか分からないポツンと一軒家状態でした）を含む 4 駅が一挙に誕生しました。そんなふるさと柿生の昔と今をお楽しみください。

写真1 昭和 30 年代の緑に囲まれた農家

写真4 工事中の新百合ヶ丘駅（右手山中）付近を走る小田急線

写真2 藁ぶき屋根の豪農の母屋と蔵（正面）（栗木）

写真5 化粧面谷の高台から谷間を見下ろす。正面は現ふるさと公園の山

写真3 下麻生住宅建設のための開発現場

柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日　（原則として月4回）

5月　9・23・30 日（毎日曜日）　6月　12・19・26 日（毎土曜日）

◎開館時間:午前10時～午後3時

第19回 特別企画展　写真で見るふるさとの原風景

戦後における村々の変貌の過程や、各地の開発の様子など、柿生村地区村々の変遷の様子をお楽しみください。（新型コロナの影響で、開催期間を変更いたします。）

期間　4月24日（土）～8月28日（土）　　会場　柿生郷土史料館特別展示室

カルチャーセミナー並びに史跡見学会は、コロナウィルスの感染状況が継続的に下火になるまでお待ちください。早くても今年度下期になると考えております。